

ソーサリー・ゼロ これまでのあらすじ

第一部「魔法使いの国」

君は、若く勇敢な魔法使いだ。
祖国アナランドを危機から救うべく、カーカバードの無法地帯を横断する旅を続けていた君だったが、ふと気がつくとも周囲の光景は一変していた。

そこは、ハルケギニア大陸のトリステイン王国と呼ばれる未知の土地であり、魔法を使える特別な血筋の者たちが王侯貴族として君臨し、大多数の平民たちを支配しているという、奇妙な世界だったのだ。
君がこのハルケギニアにやって来たのは、ルイズという少女が執り行った、『使い魔 召喚の儀式』が原因だった。
ルイズは大いに戸惑いながらも、とにかく君を 使い魔 にすることに決め、自分に対する忠誠を求めた。
今すぐカーカバードに戻る方法がないと知らされた君は、当面の庇護を得るために彼女に従うことに決めるが、自分が重大な任務を帯びた魔法使いであることは、黙っておいた。
ルイズは、貴族の子弟のための学び舎『トリステイン魔法学院』の生徒であり、君も彼女の学業につきあわされることになる。
君の『ご主人様』であるルイズは、名門貴族の令嬢でありながら、どういうわけか魔法がまったく使えぬ劣等生であり、心ない者たちから「ゼロのルイズ」という屈辱的な名で呼ばれていた。

ハルケギニアに召喚されてから七日目に、事件が起きた。
学院の教師コルベールが、解読の助けを求めて君に手渡した「エルフの魔法書」と呼ばれる書物が、土系統の魔法を操る正体不明の盗賊、土塊（つちくれ）のフーケによって奪われたのだ。
森の中でフーケに追いついた君は、盗賊の正体が美しい女だと知るが、そこに思いもよらぬ乱入者が現れる。
かつて、君によって全滅させられたはずの『七大蛇』のうちの二匹、月大蛇と土大蛇が、君とフーケに向かって襲いかかってきたのだ。
さらには、ルイズと、彼女の同級生であるキュルケとタバサまでもが駆けつけ、激しい闘いの末、月大蛇は打ち滅ぼされ、土大蛇は逃走した。

学院に戻った君は、ルイズと学院長のオスマンに、自らの正体と「諸王の冠」奪回の任務について打ち明ける。
ふたりは大いに驚きながらも、君の話信じ、君がカーカバードに帰還する方法を調べると、約束してくれた。
翌日の夜、学院で催された舞踏会から抜け出したルイズは、君のところへやって来て、必ず「ゼロ」から抜け出し、君より偉大な魔法使いになってみせる、と宣言する。
君は、『ご主人様』のルイズや学院の人々、そして、この美しい世界に対して愛着を覚えるようになっていたが、自身の内側で起きている恐るべき異変には気づいていなかった。

第二部「天空大陸アルピオン」

トリステインの王女アンリエッタが学院を訪れた日の夜、君とルイズはオスマン学院長の呼び出しを受ける。
オスマンが話すところによれば、彼の旧友であるリビングストーン男爵という貴族が、遠く離れた二つの場所をつなげる「門」を作り出す魔法を研究しているのだが、その「門」は、このハルケギニアと、君が居たカーカバードを結んでいるかもしれぬというのだ。
カーカバードへ戻れる望みが出てきたことを知った君は、男爵が住まうアルピオンに向かうが、その旅には『ご主人様』のルイズと、かつて君を相手に決闘騒ぎを起こしたギーシュが、強引に同行してきた。

港町ラ・ロシェールで「土塊のフーケ」と再会した君は、彼女と力を合わせて水大蛇を倒すが、七大蛇がアルピオンに拠点を置いて、何かを企んでいることを知る。
『白の国』の異名をもつアルピオンは、雲と霧に包まれて天空を漂う、驚異の地だった。
空飛ぶ船でアルピオンに降り立った君、ルイズ、ギーシュの三人は、リビングストーン男爵の領地へ向かうが、アルピオンは国を二分しての内乱に揺れており、男爵は行方知れずになっていた。
男爵を探してとある村に立ち寄った君たちは、そこで酸鼻きわまる虐殺を行っていた傭兵たちと出くわし、捕らえられてしまう。
君は、以前にオスマンから貰った、意思を持つ魔剣であるデルフリンガーの謎めいた力の助けを借りて、彼らの首領格であるメンヌヴィルを討ち取り、残った傭兵たちは、突如現れた、アルピオン王国の皇太子ウェールズ率いる一隊によって、殲滅された。
君たちがアルピオンに来るにいたった事情を知らされたウェールズは、リビングストーン男爵は貴族派と呼ばれる反乱軍によって捕らえられ、むごたらしく殺されたと告げる。
ウェールズは、帰還の望みが絶たれたことを知らされて意気消沈する君を、ニューカッスルの城へと招いた。
追い詰められた王党派にとって最大の拠点であるその城には、男爵の遺品や書き置きが残されているかもしれぬのだ。

秘密の地下通路をたどってニューカッスルの城に入った君たちは、倉庫で男爵の日記を見いだすが、君の役に立つような記述は何もなかった。

門の探索をあきらめてトリステインに戻ることに決めた君たちは、トリステインから派遣された大使、ワルド子爵と出会う。婚約者であるルイズとの偶然の再会に喜ぶワルドだったが、その正体は、アルピオンの貴族派を背後から操る結社 レコン・キスタの

一員だった。巨大なゴーレムがニューカッスルに襲来した混乱に乗じて、国王の命を奪い、ウェールズをも手にかけてしようとしたワルドだったが、その場に君が立ちふさがる。

ルイズとデルフリンガーの助けもあって、どうにかワルドに打ち勝った君だったが、そこに火炎大蛇が現れ、ワルドは逃走する。火炎大蛇が倒されたのち、ウェールズは君たちに、裏切り者のワルドにかわって、トリステイン大使の務めを果たしてほしいと頼む。

務めとは、かつてアンリエッタ王女がウェールズに宛てた恋文を、王女のもとへ持ち帰ることだった。この恋文の存在が明らかになれば、締結直前にあるトリステインと帝政ゲルマニアの同盟は破棄され、トリステインは単独で、レコン・キスタが主導する新生アルピオンの脅威に、立ち向かうことになってしまうのだという。君たちに手紙を託したウェールズは、数日のうちに全軍による突撃を敢行し、名誉ある戦死を遂げるつもりだと言うが、ルイズはそれに反対し、トリステインへの亡命を勧める。

ウェールズはルイズの意見に頑として耳を傾けなかったが、ついで説得に立った君の言葉に心を動かされ、たとえ卑怯者と呼ばれようとも

生き延びて、レコン・キスタを苦しめてみせると告げた。

ウェールズと意気投合した君は、彼が語った噂話から、七大蛇がレコン・キスタの頭目クロムウェルの忠実なしもべだと知る。

君たちはニューカッスルの城から脱出する難民船に便乗し、トリステインへの帰路につくが、その頃アルピオンでは大陸全土に、奇妙な甲高い音が鳴り響いていた。

それは、二つの世界を隔てる壁が引き裂かれた音だった。

第三部「さまよえる冒険者」

トリステインに帰り着いた君たちは、アルピオンでの顛末とウェールズの決意をアンリエッタ王女に報告した。アンリエッタは感謝の証として、ルイズに王家伝来の秘宝 水のルビーを譲り、また、同じく国宝ではあるが、何も書かれていない頁が

連なるだけの書物 始祖の祈祷書 を預け、その調査を頼む。

アンリエッタは、大国ガリアを中心としたレコン・キスタ討伐のための諸国連合軍が結成され、トリステインもこれに参加することを、君たちに伝える。

これによって、アルピオンの脅威は遠からず消滅することは確実なため、トリステインとゲルマニアの同盟締結は中止され、アンリエッタは、ゲルマニア皇帝との望まぬ政略結婚をまぬがれることとなった。

学院に戻った君はタバサと言葉を交わし、彼女の家族が重い病に臥せっていると知り、近いうちにその者の治療に行くと約束した。

数日後、君は荷物持ちとして、ギーシュとその恋人モンモランシーとともに『北の山』へ行くことになったが、そこで土大蛇の襲撃を受ける。

土大蛇を倒した君だったが、深手を負ったギーシュを救うために、プリム葍のしぼり汁を使い果たしてしまった。

この薬は、タバサの家族に試すはずの癒しの術を使うために、必要不可欠な物なのだ。

タルブの村の出身で、今は学院に奉公している少女シエスタの実家に、同じ薬があることが明らかになり、君、ルイズ、タバサ、キュルケ、

シエスタの五人は、タルブへと向かった。

シエスタの実家でプリム葍のしぼり汁を手に入れた君は、シエスタの曾祖父が、君と同じように タイタン の世界からハルケギニアに

迷い込んだ人物であることを知る。

君たちは、シエスタの曾祖父がぐくり抜けた 門 が存在するという洞窟を調べ、最深部にそれらしき場所を見出したが、そこに 門 はなかった。

洞窟の調査を終えた君たちがタルブに戻ると、そこに、生きた泥沼のような姿をした 混沌 の怪物が来襲する。

草木や家畜をむさぼり喰い、土や空気を汚染して、どんどん大きくなる 混沌 の怪物を前に、進退窮まる君たちだったが、ルイズが偶然開いた

始祖の祈祷書 に現れた呪文を唱えると、まばゆい光が炸裂し、怪物は跡形もなく消滅した。

デルフリンガーによれば、ルイズが唱えた呪文は、伝説の失われた系統 虚無 のものであり、彼女は 虚無 の担い手なのだという。

ルイズが普通の 四大系統 の魔法を使えなかったのは、虚無を受け継いだ代償だったのだ。

タバサに連れられて、彼女の実家にやってきた君が見たものは、恐るべき毒に心を狂わされ、我が子を目にしておびえた声を上げる、

タバサの母親の姿だった。

タバサの母親に癒しの術をかけた結果は、完治には程遠いものだったが、それでも彼女は、恐怖や苦痛からは解放されたようだった。

た。

タバサと、彼女の実家を管理する老執事は涙ながらに喜び、君は、タバサがガリア王家の出身であり、彼女とその両親は王位継承争いの犠牲者だということを知らされた。

タルブから持ち帰ったブリン莓のしぼり汁は数に余裕があったため、君は次にルイズの姉を治療するべく、ルイズの実家であるラ・ヴァリエール公爵の屋敷へ行くが、そこで執事殺しの疑いをかけられ、屋敷の中を逃げ回ることになってしまった。

ルイズの姉カトレアは君の無実を信じ、部屋にかくまってくれるが、そこに今回の事件の黒幕である風大蛇が現れ、君たちに襲いかかる。

七大蛇の主人クロムウェルは、正体不明の兵器を用意していたが、それを妨げる手段を知るかもしれぬ君を危険な存在とみなし、抹殺するべく土大蛇と風大蛇をさしむけてきたのだ。風大蛇はルイズの母親によって倒され、怪物の放つ毒を吸って重態に陥ったカトレアも、君のかけた術によって救われたが、癒しの術も、彼女の生まれつきの体質を改善するまでにはいたらなかった。

学院に戻った君は、虚無の絶大な力を恐れたルイズが、アンリエッタと相談した末、自分が虚無の担い手であることを絶対の秘密とし、二度と虚無の術を使わぬと決めたことを知った。

ルイズやキュルケ、ギーシュたちと一緒に、アルピオンに向かって出征するトリステインの軍勢を見物する君の内心は、穏やかではなかった。

クロムウェルが用意しているという、この世界の常識を超えた恐るべき秘密の兵器とは、いったいなんなのだろうか？

—

夏の訪れを感じさせる陽射しを受け、額に汗をにじませながら、西の空を見上げる。視界の遙か先を漂っているであろうアルピオン大陸の姿は、見えるはずもないが、雲と霧をまとって空に浮かぶ『白の国』の壮大な眺めは、

君の頭に刻み込まれている。

かの地では今、敵味方合わせて十万をゆうに越す大軍がぶつかり合い、火花を散らしているはずだ。

ハルケギニア諸国連合軍によるアルピオン遠征が始まって、二十日近くが経つが、トリステイン王国と魔法学院は平和そのものだ。

アルピオンにおける戦況について、宮廷からの発表はなく、人々の情報源はもっぱら、徴用された貨物船の水夫や荷役夫たちが持ち帰る土産話と、

貴族の将校たちが家族や恋人に宛てた手紙による。

君は学院とトリスタニアの町でこの大戦（おおいくさ）に関する噂を拾い集めたが、その多くは、万事が順調に進んでいることを示していた。

アルピオンへの進撃において、驚くべきことに、精強を謳われたアルピオン空軍の迎撃はなく、艦隊はまったくの無傷で上陸した。

連合軍は各地で快進撃を重ね、トリステイン軍は交通の要衝である古都シティ・オブ・サウスゴータを占領した。

主力をつとめるガリア軍は首都ロンディニウム攻略の準備にかかっており、もうすぐレコン・キスタは崩壊し、戦は終わるだろう。

噂を聞くかぎり、連合軍の勝利は揺るぎなきものと思えたが、君が本当に知りたいこと ウェールズ皇太子の安否とクロムウェルの秘密兵器

に関する情報は、なにひとつ得られなかった。

『白の国』に上陸した連合軍はすぐさま、アルピオン王家の最後の生き残りであるウェールズの生死を確認すべく動いたが、彼の足跡は、王党派最後の拠点ニューカッスルの城 今は瓦礫の山に変わっているようだ を最後にぶつとりと途絶えており、

その行方は杳として知れぬという。

君は、アルピオンを発つ前夜にウェールズと交わした言葉を思い起こす。

「たとえ卑怯者のそしりを受けようとも、私は生きる」

「この命が続く限り、奴らの悪だくみを邪魔し続けてやるさ」

力強くそう言った皇太子が『名誉の戦死』を遂げたとは思えぬが、ならばなぜ、彼とその部下たちは連合軍と合流しておらぬのだろうか？

また、ルイズの実家で風大蛇が語った、クロムウェルが準備しているという『百万の軍勢でも千フィートの城壁でも防げぬ、まったく新しい武器』の存在も噂にあがらず、その実態は推測することもままならない。

追い詰められたクロムウェルにとって、起死回生の策となるであろう兵器は、結局のところ間に合わなかったのだろうか？

それとも、連合軍を懐に引き寄せてから使って、一網打尽にするつもりなのだろうか？

君の不安はつるばかりだが、アルピオンへ出向いて直接調べるわけにもいかない。

君の身分は、トリステイン魔法学院の生徒ルイズの 使い魔 にすぎぬのだから。

今日の授業は終わり、生徒たちは夕食までのあいだ、めいめいのやりかたで時間を潰している。

時間を潰さなければならぬのは、君も同じだ。

とくにルイズから言いつけられた用事があるわけでもなく、今の君は手持ち無沙汰なのだ。

これからどこに向かうべきかを考える。

マルトーやシエスタの居る調理場へ行けば、食糧や日用品を扱う出入りの商人から仕入れた、新しい噂を聞けるかもしれない。

噂といえば、ギーシュと話してみるのはどうだろう？

彼は武門の生まれであり、三人いる兄はいずれも、アルピオン遠征に参加しているらしい。

かの地の様子を記した手紙も、何通か受け取っているだろう。

授業が終わった直後に、東の広場へ向かっているところを見かけたので、そちらへ向かえば会えるはずだ。

そこまで考えたところで、君は唐突に、アルピオンから戻った直後にコルベールとかわした会話を思い出す。

コルベールは、君の左手に刻まれた「ルーン」の効果に興味を示し、人間のような知性をもつ生き物に「ルーン」が刻まれた例を

探してくれると言ったはずだが、あれから何の音沙汰もないままだ。

君は今の今までその事を忘れていた。考えてみれば、なんとも奇妙なことだ。

調べ物には何の進展もなかったのかもしれないが、それでも彼の『研究室』を訪れるのは有意義だ。

彼のような学識豊かで誠実な人物と言葉をかわすというのは、悪くない時間の使いみちだろう。

どこへ行く？

調理場・二二二へ

『研究室』・一三六へ

東の広場・五三四へ

ルイズの部屋・一二三へ

[前ページ](#) / [表紙へ戻る](#) / [次ページ](#)